

「2020 東京オリンピック・パラリンピック」に向けた

オリパラ教育の成果と課題

-X 県におけるオリパラ教育推進校の事例研究を通して-

藤島 廉 (広島大学大学院)

1. 目的

本研究では、2020 東京オリンピック・パラリンピック (以下;「2020 東京オリパラ」と略す) に向けて、オリパラ教育推進校において実施されてきたオリパラ教育に関する取り組みについての成果や課題、及びその背景や要因を X 県を事例として明らかにした。そして、2021 東京オリンピック・パラリンピック (以下;「2021 東京オリパラ」と略す) の閉幕後における展開について考察し、オリパラ教育を継続的に実施するための一助とすることを目的とした。

2. 方法

オリパラ教育推進校でオリパラ教育を担当する教員 (以下;「教員」と略す) に対する質問紙調査 (以下;「調査①」と略す) 並びに教員へのインタビュー調査 (以下;「調査②」と略す) を実施した。

1) 対象者

調査①: オリパラ教育に関するワークショップに参加されていた 15 校の教員

調査②: 調査①の対象者から目的のサンプリング (メリアム, 2004) を用いて選定した 6 名の教員

2) 調査時期

調査①: 2019 年 1 月 23 日

調査②: 2020 年 10 月~11 月

3) 分析方法

調査①: 選択式の回答については、収集しグラフ及び表に示した。記述内容については、KJ 法 (川喜田, 1967) を用いて分類した。

調査②: SCAT (Steps for Coding and Theorization ; 大谷, 2019) を用いて分析を実施した。

3. 結果と考察

1) オリパラ教育についての成果

調査①より、X 県のオリパラ教育推進校の教員は、オリパラ教育が児童生徒の学習教材として有効であり、価値のある取り組みであると感じていることが明らかになった。

2) オリパラ教育についての課題と不安

調査①における記述の回答により、教員の視点からのオリパラ教育に関する取り組みについての課題や不安として、「コスト」「カリキュラム」「教育基盤」(教員の知識や教員間の連携) が示された。とりわけ、オリンピックやパラリンピアンといった講師の招聘について、金銭面の問題による継続の困難さに不安を感じていることが明らかになった。

3) 東京オリパラ以降におけるオリパラ教育の展望

教員は、今後もオリパラ教育が継続して取り組まれていくことを望んでいることが明らかになった。また、そのために、今後も【行政によるサポートの必要性】を感じていた。そしてオリパラ教育は、オリパラ教育推進校以外においても取り組みが展開されるべきであると考えられており、その実現のためには、【推進校を中心とした地域での取り組みの重要性】やオリパラ教育に実際に取り組んだ上での【効果実感の重要性】という示唆が得られた。

4. 結論

オリパラ教育推進校の教員は、その成果や有効性を鑑みて、今後もオリパラ教育が継続・展開されていくことを望んでいる一方で、様々な課題を感じていることが明らかになった。今後は、行政によるサポートの継続や、日々の授業における実践についての検討・共有が必要であると考えられた。さらには、オリパラ教育推進校以外においても、オリパラ教育の有効性を実感する機会の創出や仕組みが必要であることが示唆された。

5. 主な参考文献

1) 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史・根本想 (2018) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究: オリンピックパラリンピック教育を実施した教員の視点に着目して。